

# 国連フィールド支援局長 アトゥール・カレ氏に聞く

## 日本PKO 25周年

### 道路・橋の建設、能力構築支援、女性隊員の活躍

## 素晴らしい功績を残した

日本が国連平和維持活動(PKO)を開始して今年で25周年。これまで自衛隊がアジア、中東、中米、アフリカの各地で積み上げてきたきめ細やかな国づくり支援と平和構築の実績は、世界から高い評価を受けている。こうしたPKOの現場で自衛隊と長年深く関わってきた国連フィールド支援局長のアトゥール・カレ氏(58)にインド出身写真家がこのほど、東京での会議に出席するため米ニューヨークの国連本部から来日し、朝雲新聞との単独インタビューに応じた。主な一問一答は次の通り。(聞き手・日置文恵、写真モ)



—日本はPKO開始から25周年を迎えた。カレ局長、自衛隊は1992年に初めてカンボジアPKOに参加して以来、モザンビーク、ルワンダ、ゴラン高原、東ティモール、ネパール、ハイチ、スーダン、南スーダンまで、全ての活動において素晴らしい功績を残してくれた。

—日本はPKO開始から25周年を迎えた。カレ局長、自衛隊は1992年に初めてカンボジアPKOに参加して以来、モザンビーク、ルワンダ、ゴラン高原、東ティモール、ネパール、ハイチ、スーダン、南スーダンまで、全ての活動において素晴らしい功績を残してくれた。

—自衛隊との関わりは。カレ局長 私は2002年5月まで国連東ティモール支援団(UNMIST)の副特別代表、06年9月まで東ティモール事務総長特別代表兼東ティモール統合ミッション(UNMIL)の団長などを務めた経験があり、日本隊の仕事ぶりにはよく知っている。

東ティモールでは、道なき道が続く山がちな土地に、UNMISTに派遣された陸上自衛隊の施設部隊が堅固で頑丈な道路と橋を建設してくれた。それらは15年を経てもなお、卓越した品質を保って使われており、人々は「ジャバニース・ロード」「ジャバニース・ブリッジ」と呼んで日本が建設してくれたことを記憶に留めている。

その後、同国に派遣された陸自OBたちが自ら個人資金を出し合って「日本地雷処理・復興支援センター(JDRAC)」というNPO法人を設立し、東ティモールの人々の自立を助ける能力構築支援を行っていき、大変感銘として任務遂行に大いに貢献してくれた。施設部隊、訓育の在り方と相手国との関係を象徴する素晴らしい一例だ。

一方、UNMISTに軍事連絡要員として個人派遣された栗田千寿(陸佐、前NATO事務総長特別代表補佐官)は、東ティモール第2の都市パウカウを拠点に地元指導者をはじめ、女性や子供を含むさまざまな立場の人からの信頼を得て現地の様子をつぶさに観察・分析し、ニーズの把握に努め、司令部に適時適切な情報提供をしてくれた。

栗田2佐は現地と国連をつなぐ素晴らしい大使役として任務遂行に大いに貢献してくれた。施設部隊、個人派遣ともに女性隊員の活躍があったことも忘れてはならない。

2面に続く